

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

教員養成特別コース／前田  
洋一

### ■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

#### I. 学長の定める重点目標

##### I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

#### 1. 目標・計画

①授業内容 今日の“正解なき”多様な教育課題に対しては、既習の知識や技能のみで対応するのではなく、それぞれの課題に対してその実態を把握し、分析して計画を立て、実行して評価・検証し、解決へと対応していく主体的・循環的な対応力が求められている。授業内容は、様々なキャリアを持つ院生同士が協働して課題解決できるような内容を構成していく。  
②授業方法 また、教育課題の解決を進めていくため、教員一人ひとりの対応力や関係機関並びに関係者の専門力を結集して、それぞれの課題解決をすすめていく組織的対応力も求められている。授業方法としては、討議、対話など、院生同士、教員と院生とのコミュニケーションを主体とした方法を多く取り入れる。  
③成績評価 これまでの総括的な評価は、レポートや試験で行うものが一般的であったが、授業での討論、発表など授業中で行われる学習活動を継続的に評価しながら総括評価としていく。授業を通して、高度専門職業人としての力量形成状況について、専攻で設定した、3つの観点、「教職協働力」「自己教育力」「教育実践力」を基に評価していく。  
共通科目、専門科目、実習科目がそれぞれ有機的に連続・関連したカリキュラム(内容、方法、評価)を専攻全体として構成していく。

#### 2. 点検・評価

教職大学院では、平成25年度において「高度専門職業人」の育成を目指したカリキュラム、組織改革を行った。自分が担当した授業では、院生からの評価も高く、自由記述を見てもその満足度が伺える。  
このことについては、平成25年度日本教職大学院協会「実践研究成果公開フォーラム」で報告し、高評を得ることができた。以下は、アンケート調査による自由記述の一例である。「鳴門教育大学の取組紹介の中での「学校をつくる」という総合演習の事例の院生の発表から、学校のもつ目的や達成のための方法について追求する中で、多くのことを学んでいる様子がうかがえた。「学んだことを生かして、目指す学校づくりを考える」、その次に理想と実際実現しようとする際のギャップをいかに埋めるかについても考えることで、現場に生きる力にもなると思う。学校を総体としてとらえる1つの方法としてよいと思う。(50代／大学教員)」  
また、教員養成特別コースのカリキュラム改編については、SYNAPSE 2013年 12月号に「教員養成キャリア開発に応える大学院カリキュラム改革」にまとめた。

## Ⅱ. 分野別

### Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

#### 1. 目標・計画

①教育庁義務教育課で人事業務を担当した経験を生かし、教員採用試験受験者に対して具体的な対策法を提示しながら就職支援をしていく。  
②クラス学生、ゼミ生を問わず、学生の教育関係はもちろんのこと、それ以外の質問や相談にいつでも気軽に応じることができるように努める。

#### 2. 点検・評価

SRコースでの就職支援活動では、面接指導、論文指導を行った。また、クラス学生、ゼミ生を問わず、授業を履修したことにより関係ができた学生院生にも指導を行った。本年度は、正式採用率は50%、教職についての学生も90%を超えることができた。

### Ⅱ－2. 研究

#### 1. 目標・計画

①「つなぐこと」「壁をとること」をキーワードに、カリキュラム開発、学校組織をつなぐ校種間連携について研究を進める。  
②授業における学習者同士、学習者と指導者をつなぐコミュニケーション、特にダイアログ(対話)の効果について研究を進める。  
③実務家教員として、学校現場のニーズに対応した研究に取り組んでいく。

#### 2. 点検・評価

これまでの研究を基に、共著「力と夢を育てる学校づくり」教育出版社、単著「学校づくりに特効薬はあるか」ERP、共著「教育課程論」一藝舎の3つの著書をまとめることができた。  
9月にはこれまでの研究実績が認められ兵庫教育大学連合大学院教員資格審査においてDマル合となることができた。

## Ⅱ－3. 大学運営

### 1. 目標・計画

- ①副専攻長として、専攻全体の入試・広報、連携協力校運営を担当する事を通して、教職大学院コラボレーションオフィスの効果的・効率的運営に尽力する。
- ②小学校教育専修学校教育実践コースのコース担当として、学部段階での高度専門職業人として必要な資質能力育成のためのカリキュラムについて実践しながら改善を加える。
- ③学校現場での経験や教育委員会勤務(教員研修、教職員人事)の経験を生かした実務的な協力を行う。
- ④教職大学院の定員確保のため、関係機関や教育委員会、学校に積極的に広報活動を行う。

### 2. 点検・評価

副専攻長として 渉外活動について積極的に対応した。  
教職大学院のカリキュラム改編について 継続的にその成果を検証している。  
定員確保については大学訪問や県内校長会での説明等を積極的にを行っている。また、個別に市町教育委員会を訪問し教育長に対して現職院生の派遣について依頼した。  
高知大学との連携に関しては、「高知大学・鳴門教育大学教職大学院の共同設置に関する協議会」並びに「高知大学・鳴門教育大学教職大学院の共同設置に係る教育課程専門部会」の委員として尽力することができた。

## Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

- ①教育研究の成果を積極的に教育現場に広め貢献していく。特に、現職教員等に関わる研修への協力要請があれば、積極的に対応していく。
- ②教育支援講師・アドバイザー等派遣事業に積極的に貢献する。
- ③本年度は、鈴鹿市との連携協力事業の最終年度となる。総括的な評価を行いながら大学と教育委員会との連携の在り方について検討を行う。
- ④附属学校の教育研究会等について、積極的に協力する。

### 2. 点検・評価

徳島県教育委員会「小中一貫校による多様な教育システムの調査研究事業 小中一貫校教育推進会議」会長として人口減少地区における新しい学校教育の在り方について、県教育委員会、当該市町教育委員会、学校と連携しながら支援を行った。  
国立教育施策研究所 魅力ある学校づくり調査研究事業 福井県福井市光陽中学校魅力ある学校づくり調査委員として学校づくりや生徒指導に関して指導助言を行った。  
徳島市学校元気アップ推進事業学校支援専門家チームとして学校改善について指導助言を行った。  
教育支援講師・アドバイザー等派遣事業において講演依頼に対応した。  
鈴鹿市教育委員会との連携事業においては鈴鹿市内3校の中学校を担当し学校改善に関する支援を行った。  
県外の府県教育委員会や市教育委員会、校長会等からの講演活動においては積極的に対応した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)